

判定は1月・8月の日最高気温・日最低気温の月平均値について、累年平均値と移転後の数年の平均値の差を標準偏差を考慮して行くとされている。銚子の「接続」の判定はその限りでは誤りではな

いが、この考え方を他の月に当てはめ、詳しくみていくと接続不可能な月もあり、判定対象を1月・8月のみに限ることが必ずしも適当であるとはいえないことが明らかとなった。

雨に関する天気予報の利用法と信頼性を問う意識調査

山下早苗

天気予報の利用法について、都市化が最も進んだ東京と斜面が多い長崎とで、面接および郵送により意識調査を行った。対象者には、服装や行動が降雨に影響されやすい女子大生を選んだ。学歴や社会的地位は全被験者で同じなので、結果の差は地域差と解釈できる。

傘を持って家を出る目安は、長崎では降雨確率50%にピークがあるのに対し、東京では30%と50%とに2つのピークがある。長崎では、交通手段の制約が大きく天候により行動が制限されるため、女子学生は確率半々という明確な基準で行動するらしい。それに対して東京では多用な交通手段が発達していて、天候に対しても臨機応変な行動がとれるので、女子学生は降雨確率を柔軟に受け止めていると考えられる。

天気図から翌日の天気を判断する読解力は、東京のほうが高い結果となった。日本の西端に位置する長崎では、西から東へ天候が変わる（低気圧が移動する）という原則を応用できないので、天気図を読む習慣が低いと考えられる。いっぽう、週間天気予報によって将来の予定を変更するかという設問では、長崎の女子大生のうち天気予報全般への関心が高い層で、予報への高い信頼度があった。

以上のように、東京の女子大生には天気予報への高い関心があるが、長崎では個人差が大きい。西日本ではより広域のアジア天気図を公表するなど、地域の実態に合わせた天気予報が必要であろう。

在日外国人留学生の生活と抱える問題

——対面インタビューを通じて——

櫻井亜希子

1998年度の『出入国管理統計』によると、平成9年度末の「留学・就学・研修」の在留資格で滞在している外国人は15万人にのぼる。お茶の水女子大学にも1993年4月現在で、192名の外国人学生が在籍している。しかし、多くの日本人学生には彼らとの交流の経験がなく、彼らについて日常生活や考え方を知る機会も少ない。今回の調査によって彼らの生活や問題についての一例を紹介できたらと考える。

第1章では「日本における外国人の現況と問題」として、既存の外国人学生に関する先行研究・調査をとりあげ、そこから分かった彼らの現況と抱える問題について示した。居住・アルバイト

・勉強・日常生活についての問題である。

第2章では、まず「生活時間調査」の統計を用いて、一般的な日本の大学生の日常生活について、1日の時間の使い方により考察した。次に実際のインタビュー調査について、外国人学生・日本人学生ともに1人ずつ紹介している。実際の調査人数が非常に少ないので、データとしての処理はせず、各学生の生活を1例として紹介していく形をとった。

最後の第3章では、インタビュー調査についての考察をしている。ここでも定量的データとしては考えず、既存の外国人学生に対する一般的なイメージと今回の調査でわかった実際の生